

全盲の子どもの粘土あそびに向けた初期的造形行為に関する事例的研究

内藤 愛

I 問題

視覚障害がある場合には、手先による触覚的な観察が情報収集の重要な手段になり、手による操作は外界への働きかけとなり、世界を広げる役割を担う(猪平, 2005)。しかし、視覚障害の子どもは、視覚に障害があることで物の存在を把握できないために関心をもちにくく、視覚刺激の不十分さから、手の使用の不足を招いている(猪平, 2005)。また、一見正常に発達しているように見える盲幼児でも、手による探索操作の技術に問題が多い(文部省, 1984)。そして、視覚障害乳幼児の外界への関心は、母親や身近な人との安心感のあるかかわりの中で培われることが多く(猪平, 2005)、視覚障害幼児にとってかかわり手の存在は重要である。

0～2歳児期の探索活動は、初期的造形行為と関係している(奥, 2002)が、視覚障害を補うという面で手や指を使う機会として、手先の巧緻性を高め、心理的な満足感をもたらす素材として、粘土がある(猪平, 1988)。そして、粘土の可塑性にひかれて手を動かす経験は、特に物に触ろうとしない重複障害の子どもたちに、手を使うきっかけをもたらしている(猪平, 1988)。その際、音楽を用いた粘土あそびが有効である(猪平, 1988)。

よって、全盲の子どもにとって、手の探索操作を促す面から、かかわり手とともに音・音楽を用いた粘土の活動の様相を明らかにすることが重要となると考える。

II 目的

かかわり手とともに音・音楽を用いて粘土とかかわる活動において、全盲の子どもを対象に粘土あそびに向けた初期的造形行為の様相を事例的に明らかにする。

- 1 粘土あそびに向けた初期的造形行為の表出の様相を明らかにする
- 2 初期的造形行為の表出とかかわり手の援助の

関連について検討する

- 3 粘土とかかわる活動に関して音・音楽を用いる有効性を検討する

III 方法

1 事例対象児

1) 対象児

発達に困難のある視覚障害(全盲)を有する7歳5か月の児童Mを対象とする。Mは、音楽活動には、積極的であり、自分から楽しんで活動することができる。一方で手・指の操作に関して、指先で物をつまむ等手先の細やかな動きに困難が見られ、手・指を使った遊びの必要性が感じられる。

2) 対象児Mにおける粘土に関する課題の所在

対象児Mは、粘土あそびの実態把握場面において、粘土に自分から触れており、粘土に対して拒否的な様子は見られなかった。しかし粘土あそびを展開することは困難で、粘土に関心を向ける段階にあること、および音楽活動が好きであることから、本研究においてアプローチする対象として適切であると考ええる。

2 手続き

粘土の活動は、2007年5月から2008年7月までを4ラウンド(R)(1R:2007年6月～2008年6月, 2R:2008年6月, 3R・4R:2008年7月)に分け計33回実施した。

Mとかかわり手N(筆者)は机に並んで座り、Nが初期的造形行為を歌った替え歌を歌い、MがNの隣に位置し、中川(2001)を参考に選出した7種の初期的造形行為(たたく、にぎる、ちぎる、くっつける、はがす、はりつける、ひねる)に関して机上面において、10分程度活動した。

3 粘土とかかわる活動の方針

以下の4つのかかわりの方針を立て展開した。

- 1) Mがかかわり手Nとかかわりを持ちながら粘土の活動ができるように替え歌を用い、かか

わり手Nが歌う

- 2) 活動の始点と終点をはっきりさせ、Mが活動へ安心感を持てるように、活動中は常時、キーボードの伴奏を弾く
- 3) かかわり手Nが替え歌を歌っている最中、Mに初期的造形行為とみなされる動きが見られたときは、共感的な言葉がけをし、Mの表出を肯定的に受け止める
- 4) 活動内容や時間を配慮し、Mの様子に合わせて援助することを心がける

4 資料収集の方法

粘土とかかわる活動をビデオ映像で記録し、ビデオ記録から分析した。

IV 結果

1 Mの初期的造形行為の表出について

全体的に1Rから2・3・4Rを比べると、活動中に笑顔が見られることが増え、行為工夫や、他の行為が見られることが増えた（表1）。

表1 各初期的造形行為におけるMの表出の概観

初期的造形行為	曲間		曲中	
	笑顔	工夫	笑顔	工夫
たたく	◎	△	○	◎
にぎる	◎	△	○	◎
ちぎる	◎	△	◎	◎
くっつける	◎	△	○	◎
はがす	○	◎	○	◎

※表記

◎: 1Rから2・3・4Rにかけて一から+に変化した

○: 1Rから2・3・4Rにかけて+のまま変化しなかった

△: 1Rから2・3・4Rにかけて-のまま変化しなかった

またすべてのRにおいて、たたく・にぎる行為は、援助なし状況で曲中ほぼ100%の表出が続いた。ちぎる行為もすべてのセッションにおいて援助なし状況で表出が見られた。くっつける・はがす行為では、セッションを重ねるごとに援助なし表出の割合が増加した。それに伴ってはがす行為では、Mの探索的な動きが増えた。

研究開始時のMの表出（図1-1）では、援助を必要としているが、研究終了時のMの表出（図

1-2）では、援助なし状況での表出が増えた。

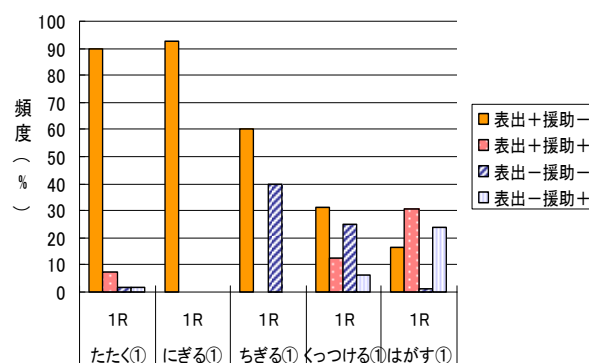


図1-1 1ラウンドにおけるMの表出の頻度 (%)

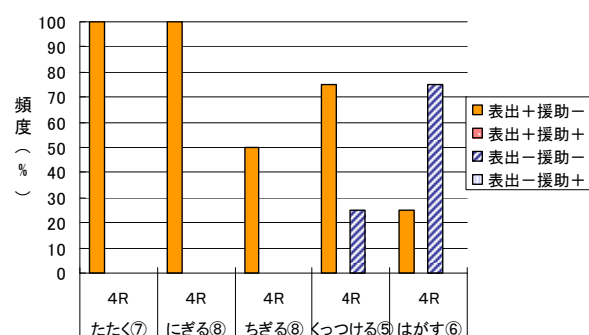


図1-2 4ラウンドにおけるMの表出の頻度 (%)

2 Mの表出とかかわり手Nの援助について

Mにとって、たたく・にぎる・ちぎる・くっつける行為は、常に援助なし状況での表出の割合が100%前後に保たれていた。とくに、はがす行為では、提示粘土を改良しセッションを重ねることで援助あり状況でのMの表出の割合の割合と援助なし状況でのMの表出の割合が逆転し、援助なし状況での表出が増加していった（図2）。

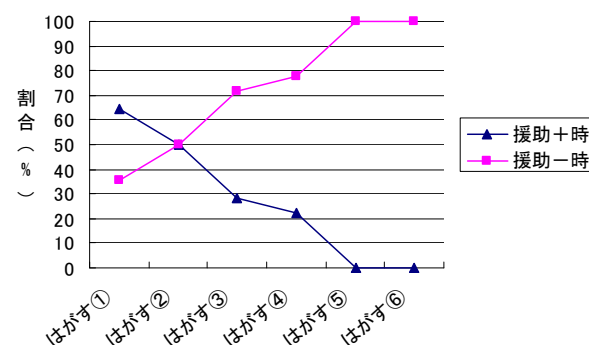


図2 はがす行為におけるMの表出+援助±時の割合 (%)

3 音・音楽を用いる有効性について

たたく・にぎる行為では、すべてのフレーズにおいて表出があり、1フレーズ目から100%の表出が保たれた。ちぎる行為では、後半のフレーズに表出が急増した。くっつける行為では、1フレーズ目から2フレーズ目に向けて増加し、2フレーズ目以降100%の表出が保たれた。はがす行為では、1フレーズ目では、表出は0%であったが、フレーズを追うごとに右肩上がりにより表出率が増加した(図3)。

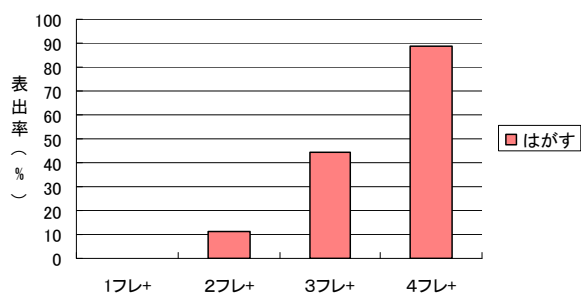


図3 はがす行為の各フレーズにおけるMの表出+援助-の表出率 (%)

V 考察

1 Mの初期的造形行為の表出について

粘土とのかかわりを重ねる中で、Mは笑顔や工夫が見られるようになり、活動に安心感を持てるように変化したと考えられる。また、初期的造形行為を積み重ねることでMは初期的造形行為の熟達をし、行為の拡がりを見せたといえる。

2 Mの表出とかかわり手Nの援助について

粘土の活動において、援助なし状況でのMの表出が増加していったことから、かかわり手Nの活動の方針は有効であったと考えられる。すなわち、①替え歌を歌ったことは、Mと一緒に粘土とかかわる存在としての役割を担った。②Mの不安状況下で、共感的な言葉がけとMの表出を肯定的に受け止めたことは、Mに自信を持たせる役割を担った。③Mの状態に合わせて提示粘土を改良したことは、Mの行為の熟達のための役割を担った。

よって、かかわり手の存在は、子どもが安心し

て活動に取り組めるような場を作るために必要であったと考えられる。

3 音・音楽を用いる有効性について

活動中にMの笑顔や工夫が増加したこと、Mの表出率が保たれたことから、①活動における緊張感を和らげ、Mに安心感と楽しさを与えた。②Mの表出を保たせることができた。③とくに、はがす行為においては探索と初期的造形行為を促した。

以上の3点から音・音楽を用いる有効性があったといえる。

VI 今後の課題

全盲の子どもが外界に働きかけることの重要性を念頭に置き、遊びの要素を含めながら粘土あそびに向けた初期的造形行為の展開を検討した。活動中において、かかわり手の音・音楽に合わせてMが行為を起こした面で、かかわり手の主導的な一面が残ってしまった。すなわち、結果として全盲の子どもである対象児Mは、行為の熟達の面では初期的造形行為に拡がりを見せたといえるが、粘土あそびへの展開には至らなかったといえる。

よって、初期的造形行為を粘土あそびにつなげる手だての検討と、かかわり手とのやりとりから粘土あそびを展開する手だての再検討が今後の課題である。

文献

- 文部省 (1984) 視覚障害児の発達と学習. ぎょうせい.
- 猪平眞理 (1988) 盲学校幼稚部における指導法の工夫—造形あそびの領域で—. 特殊教育, 56, 12-17.
- 猪平眞理 (2005) 乳幼児期における支援. 香川邦生 (編) 三訂版 視覚障害教育に携わる方のために. 慶応義塾大学出版会.
- 中川織江 (2001) 粘土造形の心理学的・行動学的研究: ヒト幼児およびチンパンジーの粘土遊び. 風間書房.
- 奥美佐子 (2002) 造形活動の初期的行動としての探索活動—造形遊びと比較検討する—. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 24, 75 - 87.